

書 評

要田圭治著
『ヴィクトリア朝の生権力と都市』
(音羽書房鶴見書店、2009年)

大久保 讓

批評理論の流行とはかかわりなく、ミシェル・フーコーの影響を受けた言説分析の手法は、もはやそれと名指されることなく、英語圏の文学研究・文化研究において、現在もなお新たな成果を生みだしつづけている。19世紀英国の都市・科学・身体などを論じながら、1970年代のフーコーの代表作『監獄の誕生』や『性の歴史I 知への意志』に言及していない研究書を見つけるのが難しいほどだ。中でも、医学的知と政治があからさまに結びつく公衆衛生のポリティクスについて、“フーコー以降”の視点からの研究は枚挙にいとまがない。

興味深いのは、狭義の社会史や医学史ではない、文学（とくに小説）の研究者が、公衆衛生の言説をしばしば主題に取りあげてきていることだ。さまざまな資料を、それが属する領域にかかわらず「言説」とみなして解読していくという手法は、もともと文学研究と相性がよいのだ。加えて、ディケンズを筆頭に、19世紀の作家たちは同時代の都市問題や衛生問題について、フィクションを含め多くの発言を残している。形式と内容の両面において「公」と「私」を媒介する装置として機能してきた小説は、制度として見た場合、公衆衛生に限りなく似ていてはいないか。

文学研究者による公衆衛生の言説へのアプローチに先鞭をつけたのが、Mary Poovey, *Making a Social Body: British Cultural Formation 1830-1864* (1995)。文学・公衆衛生学・統計学のテキストを周到に読み解いて、「社会的身体」の形成過程を鮮やかに描きだして見せて、以後の研究に圧倒的な影響を与えた。エドウィン・チャドウィックをディケンズとの関係で論じた

Catherine Gallagher の *The Body Economic: Life, Death, and Sensation in Political Economy and the Victorian Novel* (2006) も、フーコーとプーヴィのインパクトを隠そうとしない。そして何といても、21世紀に入ってから驚異的なペースで濃密な著作を上梓しつづける Pamela K. Gilbert の一連の研究を挙げなければなるまい。 *Mapping the Victorian Social Body* (2004)、 *The Citizen's Body: Desire, Health, and the Social in Victorian England* (2007)、 *Cholera and Nation: Doctoring the Social Body in Victorian England* (2008) の3冊は、コンテクストの拡がりやテキストの入念な解釈が理想的な形で結びつき、ヴィクトリア時代の都市・身体・衛生を論じるうえで、今後は避けて通れないだろう。

こうした潮流に置いてみると、要田圭治『ヴィクトリア朝の生権力と都市』が決して孤立した試みではないことが分かる。本書もまた、フーコーのインパクトを受けて、19世紀文学の研究者が挑戦した、公衆衛生・都市改革の言説分析である。

まず冒頭に、チャドウィックと並ぶ公衆衛生改革の唱道者だったトマス・サウスウッド・スミスが、1831年のコレラ流行に際して発表したテキストの一節が引かれる。医師が提案するのは、「空間的分割と監視という対策」(2)だ。ちょうど同時期に、同じ原理をもつ首都警察が設立されている(1829年)。警察の導入においてもコレラの検疫においても、個人の自由と公益との間にどのような折り合いをつけるのかが争点となった。著者はこの変化を「個人」の誕生ととらえる。「ここで医療と警察の相同性を論じることができるかもしれない。だが、それよりも、行政がその技術を行使しようとするときに、このふたつに共通して、個人が焦点化されていることにとりわけ大きな意味があるように思えるのだ。……これ以降の統治は、個人にはたらきかけ、しかもそれを強制と感じさせない方向に向かうであろう。私たちは、そのような統治実践の変換について、それがどのように起こったのかを見ていくことになる」(10)。言うまでもなく、『監獄の誕生』その他でフーコーが示唆した、規律権力による「自律した近代的主体」の誕生を踏まえた指摘である。

続く本論では、19世紀の統治性の変容が、この「個人化」という観点から徹底して論じられる。第1章「個人の誕生」は、意外なことに、ヴィクトリア朝英国ではなく、『監獄の誕生』の冒頭で語られる、1757年のフランスで行われた公開処刑のよく知られた挿話から始まる。フーコーが引用する当時の報

告をさらに引用して、著者はそこに、19世紀において「個人」が誕生する前の「始原の肉体」(15)の顕現を読み取る。それは同時に、処刑を見物する群衆にも共有され、個人の肉体を超えた全体性、あるいは祝祭にも通じるという。著者によれば、19世紀に進行していく「個人化」のプロセスは、死を隠蔽することによって、こうした始原の混沌、あるいは祝祭性を抑圧していくものだった。「公開処刑が人を祝祭的共同性の中に解き放ちかねないのであれば、新しい時代にはそれを未然に防止することを図る。それは、人を個人としてとめ置いた上で、その個人に直接はたらきかけるというかたちをとるだろう。このとき生み出されるのは、他人の身体から切り離された、ひとつひとつの身体だ。……そのような個人の誕生を、私たちは見届け、それが成長するさまを追っていくことになる」(16-17)。「群衆」は熱狂を感染させ、統治に抗う。「だから、統治は感染を未然に防ぐことを原則とし、群衆の個人への区分化が積極的に推進されるのだ」(19)。そして、ウィリアム・ホガース、ディケンズから17世紀オランダ絵画、フロイト（そしてフロイトが分析するホフマンの「砂男」）などを分析しながら、19世紀社会が「個人の身体」を徐々に統治の主体=対象として形成していくようすを物語る。

第2章「生権力」では、序章でも触れられた警察と衛生改革の親近性について述べられた上で、フーコーのいう「生権力」が19世紀英国でどのように機能したかが論じられる。それは衛生に配慮した都市の改造であり、その前提となる家屋・世帯の調査であった。ここでは、ヴィクトリア時代の聖域である「家族」「家庭」もまた、個人を適切に管理するシステムとして機能していたことが、ディケンズの『荒涼館』の解説によって示される。

ここまでの、多彩なトピックを参照しながら理論的前提を示しているのに対し、続く二つの章は、具体的な事例に基づいて、本書中もっとも読みごたえのある部分である。第3章「労働者住宅の建設」は、アンジェラ・バーデット・クーツによる新たな労働者住宅の建設計画を取りあげている。ベスナル・グリーンの一部、ノヴァスコシャ・ガーデンズに衛生的な住宅を建設するというこの計画（最終的にはコロンビア・スクウェアとして完成）は、ディケンズが助言したことでよく知られている。本章では、ディケンズの手紙や記事ばかりでなく、この計画の前提となったサウスウッド・スミスの公衆衛生論や、医学の知見を利用して労働者に健康でリスペクタブルな住宅を提

供しようとする建築家ヘンリー・ロバーツの試みも分析される。こうした労働者住宅は、健康な身体を作り出しつつ、「群居する人々の家族への、そして最終的には個人への解体」(166)を押し進める。目指されているのは、「空気と水の流通」が可能な健康な都市空間であり、それはまさしく「細胞に栄養素を送り込み老廃物を排出する身体の循環システムそのものである」(166)。この循環に支えられた都市のイメージは、第5章で詳述されることになる。

間奏のように挿入されている第4章「音」だが、非常に刺激的な視点を含んでいる。著者は、当時のコロンビア・スクウェアのルポルターージュからは「臭い」や「雑音」の描写が抜け落ちてしていると指摘し、それらが19世紀の統治性によって排除された祝祭性に通底していることを示唆する。

第5章「都市」では、「個人化」を押し進めた都市が目指した最終的な目標が、有機体と同様の「循環するシステム」であったことが示される。オスマンによるパリ改造計画は「サーキュレーションと通風のシステムによって都市を効果的に作動する『統一体』に変えようとした」ものであり、「生産と消費を円滑にする、滞りのない流通が作り出されなければならなかった」(204)という。パリとはいくつかの点で異なるものの、ロンドンもまた、サーキュレーションを可能にする都市となっていくことが主張される。衛生面から空気と水の循環が要請されたばかりでなく、貨幣と人の循環も、都市を「生かす」ためには必要だったというのだ。その中で個人は「情報の、貨幣の、商品の、知識の経めぐる諸点」(242)と化した。

第6章「都市の死」は、第5章の陰画だ。生権力のあらわれである都市が、否応なしに剰余としての死を内包していることを論じている。著者は、そうした死こそが、生権力に対する批判の可能性でもあると主張する。「……想像力の中でもはや解明することのできない原初存在に、人を戻してみるのだ。そのとき人は、……己の外皮として纏ってきたアイデンティティをかなぐり捨てる。そのとき彼は、エロスにあふれた存在者に立ち戻るであろう。そのとき、彼はもはや健康に守られた者であることをやめ、死を包摂するところに立ち戻るであろう」(273)という、幻視的なメッセージが最後に提示される。

サウスウッド・スミスやロバーツなど、珍しい一次資料の紹介・分析からは、学ぶところが多い。その一方、死を通して顕現する「始原の身体」ある

いは「祝祭性」という——『エロティシズム』のバタイユさながらの——イメージが、生権力による統治へのアンチテーゼとして、全編で繰り返し語られている点には違和感が残る。そうした「原初」のイメージは、廻行的に構成されたノスタルジーにすぎず、それ自体19世紀に商品として発明され、流通してきたものではないか。そもそも、「祝祭性」はそれほど無条件に賞賛されるべきものだろうか。「カーニヴァルの懐古趣味、批評性を欠いた民衆主義（カーニヴァルはしばしば、自分より強いものでなく、より弱い立場にある社会集団——女性、人種的宗教的少数者、『こちら側に属さない者』——を《代替者として忌避する》過程において、暴力をもって差別し、悪魔化する）、支配的な公式文化を結局は廃絶できずに、それに公認されたまま共犯関係を保つカーニヴァル」というピーター・ストリブラスとアロン・ホワイトの指摘（『境界侵犯 その詩学と政治学』本橋哲也訳、35）は、今なお有効性を失っていないし、バフチンのカーニヴァル論についても、そのスターリニズムとの親和性について厳しい見直しが行われている（貝澤哉『引き裂かれた祝祭 バフチン・ナボコフ・ロシア文化』参照）。

「サーキュレーション」を重要なテーマとしながら、帝国におけるグローバルなサーキュレーションのありかたを十分に論じていない点も気にかかった。例えばコレラは「虎視眈々とイギリス上陸の機会をうかが」（1）う、異質な存在としてのみ描かれ、その流行はあくまで「国内の問題」であり、英国のインド統治との関連が読み取れなくなっている。帝国における情報と商品と身体の流通を取り込めていれば、本書での議論は、よりニュアンスに富んだものとなっただろう。